

## 日本ロシア文学会第58回研究発表会

## 報告要旨(予稿)集

(2008年10月11~12日, 中京大学)

- 
- A01 赤尾 光春 ワシーリー・グロスマンとデル・ニステルーソ連「ホロコースト文学」の起源
- A02 秋草俊一郎 謎解きナボコフ『ディフェンス』—モラル・ゲームとして
- A03 岩本 和久 ヴィクトル・ペレーヴィンと『収容所群島』
- A04 樫本真奈美 ツヴェターエワ『私のプーシキン』における絵画と色彩
- A05 木寺 律子 劇詩『大審問官』と共同体の問題
- A06 久野 康彦 イヴァン・ツルゲーネフ『まぼろし』論
- A07 越野 剛 ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラのイメージ
- A08 初内 裕子 芥川龍之介とツルゲーネフ—「山鳴」をめぐる芥川の読書経験から
- A09 古宮 路子 オレーシャの散文と映画
- A10 中野 幸男 亡命者の過去への返答—シニャフスキー『おやすみなさい』における作者の自己表象
- A11 宮風 耕治 ユーリイ・トゥィニャーノフのSF論
- A12 宮本 宗実 われらが“壁の向こう”で見たものは?—有理数と無理数
- B01 浦井 康男 カラムジン『ロシア人旅行者の手紙』におけるテキスト・バリエーションの分析
- B02 エフィーモワ・ゾーヤ 話し言葉の語りにおける談話標識—ロシア語と日本語の対照研究
- B03 Г. Шатохина. Описание косвенной фонетической межъязыковой интерференции на материале реализации японскими учащимися русских бифонемных консонансов
- B04 Н. Рогозная. Механизмы функционирования теоретической модели интерязыка
- B05 佐藤 規祥 自動詞と造格に立つ語との関係
- B06 鈴木 理奈 ロシア語の前置詞と前置詞等価物—数量名詞語形を中心に
- B07 Ю. Ключков. Значение упражнений для предупреждения и устранения грамматических ошибок японских учащихся в структуре практического занятия по русскому языку
- B08 С. Сивакова. Русский язык для детей-билингвов и детей-мигрантов в Японии
- B09 鈴木淳一, 高橋健一郎, 田村愛火, ジダーノフ・ヴラヂーミル  
Своеобразие современной русской речи на примере использования логоэпистем
- C01 有泉 和子 ロシア人の見た日本—シュパンベルグ探検隊の日本北辺航海
- C02 坂中 紀夫 1830-40年代の教育システムにおける新しい関心—C.ウヴァーロフと「ナロードノスチ」
- C03 塚田 力 古儀式派スキンヘッド—ニコライ・コロリョフの『スキンヘッドバイブル・新約』について
- C04 一柳富美子 《エヴゲーニイ・オネーギン》プーシキンからチャイコフスキーへ—原詩の音楽的処理を探る
- C05 見附 陽介 M.M.バフチンの対話理論における人格とモノの概念—C.Л.フランクとの比較から
- D-α ワークショップ ロシア文学にとって翻訳とは何か?—理論・実践・受容 (望月哲男, 木村崇, 沼野充義, 吉岡ゆき, 柴田元幸)
- D-β ワークショップ チャストゥーシカの複合的研究に向けて—コストロマ州ネレフタ地区の採録資料を題材に (伊東一郎, 熊野谷葉子, 柚木かおり)
- 

日本ロシア文学会

2008年9月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 58<sup>th</sup> Annual Assembly  
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature  
(Chukyo University, 11-12 October, 2008)**

---

- A01** M. Akao. Vasily Grossman and Der Nister: The Origin of the “Holocaust Literature” in USSR
- A02** S. Akikusa. Reading Nabokov’s *The Defense* as a Moral Game
- A03** K. Iwamoto. Victor Pelevin and *The Gulag Archipelago*
- A04** М. Касимото. Картины и цвет в «Моем Пушкине» М.Цветаевой
- A05** Р. Кидэра. Поэма «Беликий инквизитор» и проблема общины
- A06** Я. Кюно. О повести И.С.Тургенева «Призраки»
- A07** Г. Косино. Образ холеры в романе Ф.М.Достоевского «Бесы»
- A08** Y. Momiuchi. Akutagawa Ryunosuke and I.S.Turgenev: How Did Akutagawa Read the Materials for “The Woodcock?”
- A09** М. Комия. Прозы Ю.Олеши и кино
- A10** Ю. Накано. Ответ эмигранта на прошлое: саморепрезентация автора в «Спокойной ночи» А.Д.Синявского
- A11** К. Миякадзе. О критике фантастики Ю.Тынянова
- A12** M. Miyamoto. What Have We Seen “beyond the Wall?”: Rational Numbers and Irrational Numbers
- B01** Y. Urai. A Study on Text Variants in the “Letters of a Russian Traveler” by N.M.Karamzin
- B02** З. Ефимова. Сравнительное исследование употребления дискурсивных маркеров на материале устных нарративов на японском и русском языках
- B03** Г. Шатохина. Описание косвенной фонетической межъязыковой интерференции на материале реализации японскими учащимися русских бифонемных консонансов
- B04** Н. Рогозная. Механизмы функционирования теоретической модели интерязыка
- B05** Н. Сато. Отношение непереходного глагола со словом в творительном падеже
- B06** Р. Судзуки. Русские предлоги и эквиваленты предлогов: словоформы параметрических существительных
- B07** Ю. Клочков. Значение упражнений для предупреждения и устранения грамматических ошибок японских учащихся в структуре практического занятия по русскому языку
- B08** С. Сивакова. Русский язык для детей-билингвов и детей-мигрантов в Японии
- B09** Д.Судзуки, К.Такахаси, А.Тамура, В.Жданов. Своеобразие современной русской речи на примере использования логоэпистем
- C01** К. Ариидзуми. Япония глазами русских: плавание капитана М.Шпанберга к северным берегам Японии
- C02** Н. Саканака. Новые веяния в системе народного образования 30-40-х годов XIX века: С.С.Уваров и понятие «народности»
- C03** Ц. Цукада. Старообрядческий скинхед: о «Библии скинхеда. Новый завет.» Николая Королева
- C04** F. Hitotsuyanagi. *Evgeny Onegin* – From Pushkin to Tchaikovsky: Research on Opera Arrangement of Original Verse
- C05** Ё. Мицукэ. Понятия личности и вещи в концепции диалога М.М.Бахтина (в сопоставлении с онтологической идеей С.Л.Франка)
- D-α Workshop.** What Is Translation for Russian Literature? – Theory, Practice, Reception (T.Mochizuki, T.Kimura, M.Numano, Y.Yoshioka, M.Shibata)
- D-β Workshop.** К комплексному исследованию частушек: на примере звуковых материалов Нерехтского района Костромской области (И.Ито, Ё.Куманоя, К.Юноки)
-

【A01】 ワシーリー・グロスマンとデル・ニステル  
—ソ連「ホロコースト文学」の起源—

赤尾 光春

独ソ戦の勃発により、ソ連のユダヤ系作家たちは、反ファシスト闘争の一環として、ナチス・ドイツによるユダヤ人の殺戮をテーマにした作品を書く自由を得た。一方で、そうした創作活動は、ソビエト国民全体を襲った戦争の悲劇を強調する当局の公式と、ナチスの絶滅政策によるユダヤ民族の受難という特殊な歴史経験を伝える使命感とのせめぎ合いの場でもあった。

本発表では、こうした創作上のジレンマを抱えつつ、ナチスによるユダヤ人虐殺の実態と真相を戦時下の読者に伝えるとともに、この悲劇を記憶化する上で重要な役割を果たした二人のユダヤ系作家、ワシーリー・グロスマンとデル・ニステルの創作活動を取り上げる。

ワシーリー・グロスマンは、従軍記者としてつねに最前線にいた経験を通じて、赤軍による解放とともに次々と明るみに出たナチスによる蛮行の実態を知ったことから、独ソ戦の最中に短編『老教師』と二つのルポルタージュ『ユダヤ人のいないウクライナ』と『トレ布林カの地獄』など、後に「ホロコースト」として知られることになるユダヤ人絶滅政策の存在を同時代の読者に伝える先駆的な作品を残し、ナチスの人種差別政策の比類なき性格を露呈させるとともに、死を前にした受難者の心理描写を通じて「ホロコースト」現場の再現を読者に強いる、独特なスタイルを確立した。

一方、「同伴者作家」として自らに沈黙を課していたイディッシュ語作家のデル・ニステル（ピンハス・カハノーヴィチ）は、戦時中、疎開先のタシュケントで、「現在占領下にあるポーランドで起きた事件」という副題を付けた4つの短編を残した。デル・ニステルは、これらの作品において、ソビエト国外で起きた実話を報告する体裁をとりながらも、伝統的な殉教物語の枠組みを復活させることによって、破滅を宣告されたユダヤ人の豊かな文化的世界を創作において回復することができた。

戦時中のユダヤ人の受難をめぐる両者の創作上の特徴を、文化的背景(ユダヤ文化との距離)、主題の選定、検閲を意識した戦略という三つの観点から比較・分析することにより、ソビエト文化の第一線で活躍していたユダヤ系作家とイディッシュ民族文化の担い手という、二種類の世界に生きたユダヤ系作家が、「ホロコースト」という前代未聞の経験を記憶化する際に採った文学的手法の相違点と共通点について考察する。

(あかお みつはる, 大阪大学)

【A02】 謎解きナボコフ『ディフェンス』  
—モラル・ゲームとして—

秋草 俊一郎

ナボコフの長編第三作として1930年に世に出た『ルージンのディフェンス』は、1964年に『ディフェンス』としてマイケル・スキヤメルと共訳された小説である。おそらく、この小説はロシア語作品に限って言えば『賜物』、『断頭への招待』に次いで評価が高いもので、ブライアン・ボイドも評伝で「最初の傑作」として一章をまるまる割いて論じるなど、それなりに研究者の関心を集めてきたと言っていいだろう。

しかし、その論じられ方はいくつかのパターン(チェスや otherworld といったナボコフ研究特有のテーマ)に限られてきた。これらはどれもナボコフをナボコフたらしめていると思われる主題だ。つまりこうした評価の裏側を覗いて見れば、論者たちはこの作品をもつばらある種の枠組み(ナボコフ研究の文脈)の中で、典型的なナボコフ作品として読むことで「最初の傑作」としての地位を与えてきたことがわかる。

しかし、ここでひとつの疑問が生じる。読者がチェスや otherworld などのナボコフ独特のテーマに対し親和性を持たないならば、この小説に価値を見いだせないのだろうか? もしそうならば、ナボコフ研究はあまりに貧しいものになり下がってしまうだろう。

本発表では、ルージン父子の親子関係という観点からの読み直しを提示する。もし親子関係という一見あまりに平凡なテーマの扱いが不十分であったなら、それはナボコフの意識的なミスリーディングによって生まれた、いくつかの心理的な要因が読者の側にあるせいだと考えることができる。ハンバートのロリータ幻想についての本と思われがちな『ロリータ』が、ハンバートの語りによっていかに抑圧されようとも、ドロレス・ヘイズという人格を持った人間をめぐる物語でもあるように、『ディフェンス』も、いかにルージンがチェスマシーンのように見えようとも、生身の人間についての物語としても読める。その意味で『ディフェンス』は『ロリータ』の先駆けともいえる小説である。

本発表ではナボコフの自作翻訳を綿密に参照し、この小説におけるルージン父子の関係を再考する。そこで浮かび上がってくるのは、精巧なチェスプロブレムがそうであるように、この小説全体がただひとつの解に収斂していくという事実だった。

(あきくさ しゅんいちろう, 東京大学院生)

【A03】 ヴィクトル・ペレーヴィンと『収容所群島』

岩本 和久

現代ロシアを代表する作家の1人であるヴィクトル・ペレーヴィン(1962-)は、SFの流れをくむ幻想作家とも、ポップなポストモダン作家とも、東洋思想に関心を持つ神秘主義者ともみなされてきたが、その作品を注意深く読むなら、彼が同時代のロシア社会と文化に深い関心を寄せ続けてきたことがわかるだろう。

ペレーヴィン自身はロシアの象徴として、しばしばアイロニカルな形でソルジェニーツィンの名を挙げている。たとえば、インタビューの中で彼は、『ジェネレーション II』や3巻本選集の表紙となったチェ・ゲバラの肖像について、ソルジェニーツィンやエリツィンやジョン・F・ケネディ Jr.でも良かったと語っている。『妖怪の聖なる書』でも、ロシアを代表する人物として、ソルジェニーツィンの名が挙げられる。こうした皮相なポーズとは別に、「収容所」や「監獄」は彼の作品の重要な主題となっており、そこにはたとえば『収容所群島』を想起させる表現を認めることもできる。

『幼年期の存在論』では、主人公が幼年時代に暮らしていたアパートが監獄のイメージと重ねられる。囚人が壁を叩いて連絡を取り合う描写や作業服の支給といったモチーフは『収容所群島』にも登場するものだ。

ロシア社会全体を疾走する列車のイメージと重ねた『黄色い矢』にも『収容所群島』からのひそかな影響を読み取ることができる。『黄色い矢』には監獄の車両が登場するが、その先には「弾痕と炎の跡」だけがある空の車両が連なっている。この謎めいた車両のイメージは『収容所群島』の囚人の虐殺の描写と重なるものだ。車両の外部へ脱出する際の描写も『収容所群島』を想起させる。

『僕が越えたかった橋』の語り手は、自分が12歳の時に見た橋について回想する。この橋は収容所の囚人が作ったものだ。ここでも別世界への脱出という主題が収容所のイメージと重ねられている。

『エンパイア V』では、21世紀のロシア社会が「群島」として提示される。ペレーヴィンの主人公にとって「この世界」とは「収容所」なのであり、ここからの脱出が模索されなければならない。

ペレーヴィンは、ソルジェニーツィンの提示した重い歴史を、唯我論的な形で「私有化」、あるいは「箱庭化」しているのかもしれない。だが、同時に彼は過去のエピソードの中に、普遍的な、現代にも通じる感覚を見出しているのである。

(いわもと かずひさ、稚内北星学園大学)

【A04】 ツヴェターエワ『私のプーシキン』における絵画と色彩

樫本 真奈美

マリナ・ツヴェターエワの散文『私のプーシキン』(1937)における二つの視覚芸術(絵画と彫像=プーシキン記念像)と色彩が、作品においてどのような構造的役割を果たしているのかを考察する。

まず、散文の冒頭に登場する三つの絵画に注目すると、A.A.イワノフ『民衆へのキリスト出現』に小さく描かれたキリストと、モスクワのプーシキン広場にあるプーシキン記念像との相似関係が浮かび上がる。

そこから「受難者キリスト=詩人プーシキン」というモチーフも連想される。シンボリスト、ポストシンボリストをはじめとする「銀の時代」の詩人たちに好まれた「受難者=詩人」というモチーフが、『私のプーシキン』では、「黒いプーシキン像」という、モスクワ・プーシキン広場に現存する記念像に仮託され、批判的に用いられることにより、詩人独自の「プーシキン」像が提示される。

その際、重要な役割を果たしているのが、散文を貫く「黒」への偏愛、さらには知識や教養が十分に備わっていない子どもの立場として登場する叙情的「私」の視点である。一見「自伝的回想」の体裁をとるこの作品において、語り手が持つ大人の「私」という視点に対置されながら、子どもの「私」の視点が記念像と関わることにより、プーシキン像の「物質性」が強調される。また、言葉は「異化」され、意味が「格下げ」される。幼い頃のツヴェターエワにとって重要な「視覚的授業」だったというプーシキン像のイメージは視覚と聴覚を結ぶ媒体となり、色や音が(作者はこの作品を「声に出して読む」ことを重要視している)それぞれ固有の言語だとすれば、『私のプーシキン』は、そうした異なる「言語」がプーシキン像を中心に共鳴することによって構成されているといえる。

そうすると、未来派の実験的詩的言語やアヴァンギャルド画家との影響関係も視野に入ってくるが、まず、この作品には創造者たる芸術家を神になぞらえ神格化することへの否定的要素が読み取れることに注意しなければならない。そこには、当時ソビエト連邦で、1937年のプーシキン記念祭が国民の愛国心高揚のための「政治的手段」として大きな役割を果たしていたことへの作者の批判が大きく関係しているだろう。

そうした点も踏まえながら、作品における視覚的媒体の構造関係を考察することが本発表の狙いである。

(かしもと まなみ、神戸市外国語大学院生)

【A05】劇詩『大審問官』と共同体の問題

木寺 律子

本発表では、Ф.М.ドストエフスキー (1821-81) の代表作『カラマーゾフの兄弟』の主要な登場人物イヴァン・カラマーゾフが語るさまざまな思想を考察する。イヴァンの思想は先行研究でも非常に多く扱われてきたが、本発表では、特に、共同体の問題に着目する。

イヴァンは国家と教会の問題についての論文を書き、これについて修道院で話している。また、その後、弟のアリョーシャを相手に、自分が創った劇詩『大審問官』を語って聞かせる。国家と教会の問題についての論文と劇詩『大審問官』は、その内容の深遠さのために、ほぼ独立した作品と見なされ、先行研究において別個に取り上げられてきた。しかし、この二つの作品は、イヴァンという一人の人物が同じ時期に考え出したものであるという事実を反映して、似通った問題を扱っており、裁判や統治の問題といった事柄へのイヴァンの興味関心を示している。イヴァンの話を聞いた周囲の人々の反応も、論文の場合と劇詩の場合で、類似している。

劇詩『大審問官』の考察においては、イヴァンが過ごしている 19 世紀ロシアの状況だけではなく、劇詩の舞台となった 16 世紀のスペインの町セビリアの歴史的状况も参照する。セビリアの異端審問は、ヨーロッパのキリスト教社会の共同体の仕組みの負の側面を、表に引き出す出来事であった。その上で、『カラマーゾフの兄弟』という作品世界における現実の町の共同体と、そこで起こる父親殺しの事件と、劇詩『大審問官』の関連性を指摘し、劇詩『大審問官』のような思想を持っている人物イヴァンが、町で実際に起こる事件をどう感じるかを考える。

また、小説『カラマーゾフの兄弟』が書かれた背景にある、ドストエフスキー自身と宗務院総監ポベダノースツェフの付き合いなども考慮にいれたい。

(きでら りつこ, 同志社大学)

【A06】イヴァン・ツルゲーネフ『まぼろし』論

久野 康彦

『獵人日記』『父と子』などで 19 世紀ロシアを代表する作家とされるイヴァン・ツルゲーネフは、また 1850 年代半ばから晩年に至るまで「神秘小説」と称される一連の作品も書いている。質量ともに作家の創作において重要な位置を占めるにもかかわらず、「神秘小説」は今日に至るまでツルゲーネフの創作活動において明確な位置づけをなされているとは言い難い。

「神秘小説」を見かけに反し時代を敏感に反映した現実的な作品、あるいは反時代的なロマン主義的作品ととらえるこれまでの研究に対し、「視覚」と「神秘」という 2 つの要素から「神秘小説」を分析することにより、新しい解釈が得られるというのが私の立場である。すでにそのような立場から最晩年の中編『クララ・ミリッチ』を分析した論文を私は発表しているが(「実証主義の彼岸—И.С.ツルゲーネフの中編『クララ・ミリッチ(死後)』における写真のテーマ』『スラヴ研究』54, 2007)、今回は「神秘小説」としては比較的初期の作品にあたる『まぼろし』(1864)を採り上げたい。

神秘的要素が作品全体を覆いつくしているという点では、彼の創作の中でも画期的な意味を持つ『まぼろし』は、また、とりわけ「エリス」という不思議な女性の正体が最後まで明らかにされないこともあって、解釈が難しく読者を困惑させる作品でもある。しかし、作品に描かれている視覚的要素と非視覚的要素に注目し、「視覚」と「神秘」の対立という観点からこの作品を読み返すと、ある明快な構図と意味を見出すことができるというのが本報告の見通しである。

研究発表では、まず『まぼろし』の創作史をたどる。そこに見ることができるのは、構想段階においてすでに「視覚」が重要であったという点と、それが安定から不安定へと変わっていった事実である。次いで実際のテキストを検討し、一見不可思議な出来事に満ちた語り手とエリスの飛行の物語を「視覚」と「神秘」という観点から意味づけを試みる。

ツルゲーネフの「神秘小説」における「視覚」と「神秘」の対立は単純なものではない。視覚化によって神秘を消滅させるというのが本来の出発点であるにもかかわらず、時として視覚化そのものが新たな神秘・恐怖・不安をもたらすこともツルゲーネフは見逃していない。それは合理が神秘をもたらし、神秘が合理を求めるという 19 世紀という時代のあり方を敏感に反映した結果でもあるのである。

(きゅうの やすひこ, 放送大学)

【A07】ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラ  
のイメージ

越野 剛

19世紀になって世界的な流行病（パンデミー）となったコレラは、ヨーロッパでは革命のイメージと結びついた。フランスに発して西欧諸国に広がった革命の波が、人から人へと伝染する病気を連想させた。死をもたらす疫病の恐怖がしばしば都市下層民の暴動を引き起こしたこと、とりわけ2回目と3回目のコレラ流行がそれぞれ10月革命と2月革命と時期的に重なったことの影響が大きい。ロシアでも、1831年にはノブゴロド屯田兵管区やペテルブルグでコレラを契機にした暴動が発生している。19世紀後半の文学作品において、伝染病のイメージは、政府転覆を目指す革命家と腐敗した国家権力との双方を風刺するのに用いられるようになった。ドストエフスキーの『悪霊』もその中に位置づけることができる。

『悪霊』は、福音書から取った題辞に見られるように、キリストによって病気から癒される人としてのロシア社会という構図を持っている。その病気は無神論や革命思想である一方で、コレラのイメージとしても現れる。とりわけシュピグリン工場の不潔な環境で働く労働者がコレラと革命の温床と見なされている。レンプケ知事の公邸の前に集まった労働者が警察によって鎮圧される場面は、1831年のペテルブルグのコレラ暴動のパロディになっている。ステパン・ヴェルホヴェンスキーとその仲間たちのサークルも当局によって危険思想の温床と見なされている。シュピグリン工場とステパン氏のサークルを指す「温床 *рассадник*」という単語が革命と病気のイメージを結びつけている。ピョートル・ヴェルホヴェンスキーの政治的陰謀を本物のコレラに喩えるならば、その父ステパン氏の持病が「擬似コレラ *холерик*」であることも理解しやすくなるだろう。

発表では上記の論点に加えて、ドストエフスキー自身の持病であった癩癩と『悪霊』におけるコレラのイメージ的なつながりを考察する。さらに同時代の他の「ニヒリスト小説」との比較によって、ドストエフスキーによるコレラ描写の特徴を明らかにしたい。

(こしの とう, 北海道大学スラブ研究センター)

【A08】芥川龍之介とツルゲーネフ

—「山鳴」をめぐる芥川の読書経験から—

初内 裕子

芥川の「山鳴」はトルストイとツルゲーネフを主人公に据え、山鳴嶽におけるいさかいを通して両文豪の心理を描写した作品である。先行研究によって明らかにされているように、山鳴嶽のエピソードはトルストイの息子イリヤの回想録に記されている実話である。

「山鳴」の材源研究において論じられてきたのは芥川のトルストイ観が主体であり、芥川のツルゲーネフ受容はさほど検討されてこなかった。芥川は他の作品でもトルストイにしばしば言及しており、そのなみなみならぬ関心を考慮すればそれも当然である。しかし「山鳴」におけるツルゲーネフは人間トルストイを描きだすための単なる対比人物として扱われているわけではない。イリヤの回想録からこの小さなエピソードをわざわざ拾い上げた芥川には、トルストイだけでなくツルゲーネフへの接近もあったはずである。

山鳴嶽のエピソードを肉付けし作品として仕上げるための資料として芥川が用いたのは、やはりすでに指摘されている通りピリューコフによるトルストイ伝であり、その点はほぼ間違いない。しかしもう一点、モードによるトルストイ伝(Aylmer Maude, *The Life of Tolstoy: First Fifty Years*, London, Constable, 1908)も芥川は精読していた。遺品として残されているこの書には芥川の書き込みが数カ所に渡って認められ、その書き込みをたどって行くとツルゲーネフの心情を丁寧に読み込む芥川の姿勢が浮かび上がってくるのである。さらに、やはり芥川が所蔵していたツルゲーネフ作『獵人日記』の英訳本(A Sportsman's Sketches, tr. by Constance Garnett, London, Heinemann, 1906)にも書き込みが残されており、それらを検証すると、「エルモライと粉屋の女房」が「山鳴」の情景描写に組み込まれていることが裏付けられる。

そこで本発表では、再度「山鳴」の材源を整理し直し、合わせて芥川がモードのトルストイ伝と『獵人日記』をどのように読んだかを検証することで、芥川のツルゲーネフに対する親近感を明らかにしたい。

(もみうち ゆうこ, 早稲田大学)

【A09】オレーシャの散文と映画

古宮 路子

ユーリイ・オレーシャ (1899-1960) の散文作品の強い視覚性は、重要な特色の一つとして、彼に関する多くの研究で指摘されてきたことである。オレーシャはヴォロンスキイの影響を受け、芸術家による世界の知覚を視覚の図式で捉えている。そして、そのような認識の下で書かれた彼の作品では、「あるものが別のものに似て見える」ということに基づく視覚的な比喻により、対象がその外見を変容したかのように描かれる方法が度々用いられる。オレーシャはこの方法に対して極めて自覚的であり、彼の小説では出来事の経過から頻繁に逸脱して、そのような世界の変容の経過が解説される。

オレーシャの散文の視覚的性格の背後には、彼が絵画に対して抱く強い関心がある。それを示す事実の一つとして、彼は雑誌の企画「読者との談話」で、自分が作家になったきっかけには幼年時代に見た移し絵の「色彩」からの強い印象があると述べている。モノクロからカラーに変化する移し絵のイメージは、面白味のない現実を美しく描き出す、オレーシャの作家としての本領に繋がる。

さて、オレーシャが「色彩」と呼ぶもう一つの芸術ジャンルは映画である。1920年代には多くの作家が映画の技術を意識した方法を散文に導入したが、オレーシャの散文は映画への意識が特に強い。彼の代表作『羨望』の決定稿の中には、実際には作品に含まれなかった一節「映画館ロビーでの会話」があった。そこで彼の意見を代弁すると思われる登場人物によってなされる主張は、映画は小説を無用のものにする、というものである。創作において視覚的イメージの伝達をとりわけ重視するオレーシャにとって、言葉は芸術家の視覚的イメージを伝える役割を果たす。ゆえに、視覚的イメージが既にスクリーン上に実現されているのであれば、言葉でそれを描出する必要はない。オレーシャにとって映画は、言語芸術よりも洗練された本なのである。また、オレーシャは創作する上でプロットをあまり重視せずイメージの赴くままに書き進めていったが、そういった創作方法を探るオレーシャにあって、散文の構成は個々のイメージのモンタージュとなった。そのため、直喩により意外な対象同士を結び付けるオレーシャの比喻はプロットから逸脱する傾向が強い。このように、オレーシャの小説は同時代の映画の強い影響の下に書かれたといえるのである。

(こみや みちこ, 東京大学院生)

【A10】亡命者の過去への返答—シニャフスキー『おやすみなさい』における作者の自己表象—

中野 幸男

シニャフスキー作品に色濃く表された 1966 年の裁判、収容所や亡命体験は、20 世紀のロシア社会を代表する現象として考えられてきたが、あまり文学的な問題として考えられてはこなかった。挑発的な事実は社会的に注目を浴びたが、それらを媒介として語られる文学的な問題提起はあまり触れられていない。

先行研究はゴンブローヴィチやナボコフをシニャフスキーと並べることでその独自性や系譜を浮き立たせ、19 世紀のリアリズムの伝統、パロディ性を挙げながらシニャフスキーを文学史上に位置づけていた。そのような伝統の上に作り出されたシニャフスキーの独自性とは、環境の変化により顕在化した文学的問題に対する返答として、自分自身を題材にしながら、逮捕・尋問・スターリンの死などのソヴィエト的現象を、再現でなく戯画化したことにある。

亡命地フランスにて 1984 年に出版されたアブラム・テルツ『おやすみなさい』は作者自身のソヴィエト時代の経験が基盤となっている。アブラム・テルツ名における地下作家活動が露見した 1965 年のシニャフスキー逮捕から遡行しながら、尋問、元エスエルの父の思い出、1953 年の記憶、留学生エレンとの交流及び KGB との接触が語られる。

シニャフスキーの創作全体から見ると、1970 年代に収容所時代の文学的創作の結実とも言える『合唱の声』『プーシキンとの散歩』『ゴゴリの影に』を発表した後、84 年に出された『おやすみなさい』は死後発表された『猫の家』を除けば唯一かつ最後の長編小説といえる。それ以前に発表された短編『ちびのツォレス』は同様にシニャフスキーを主人公とした物語であるが、『おやすみなさい』に比べると、シニャフスキーを取り巻くソヴィエト的な事象はあくまで周辺の人物に降りかかる災難として描かれている。一方『おやすみなさい』ではソヴィエト時代はより密接にシニャフスキー本人の話のように描かれる。

『おやすみなさい』を「個人的体験としての異論派」などの回想と補足的に対照しながら、事実の選択とその描写において作品がどのような意図のもとに構成され、シニャフスキーが自分自身とその時代を描写することでどのような文学的問題を提起していたかを考察する。

(なかの ゆきお, 東京大学院生)

【A11】ユーレイ・トゥィニャーノフのSF論

宮風 耕治

1924年に発表されたトゥィニャーノフの文芸時評「Литературное сегодня」は、ザミャーチンの『われら』、A.トルストイの『アエリータ』、エレンブルグの『フリオ・フレントの遍歴』などを同時代に論じた、SF史的にも非常に貴重な文献である。しかし、この文芸時評のSF史的な意義は、ただ単にSF作品を取り上げたという事実だけにはとどまらない。

「Литературное сегодня」は同年に発表された批評「Промежуток」と対をなすものである。後者が現代ロシア詩の可能性をパステルナークなどのさまざまな同時代の詩人の実作を取り上げて具体的に論じたのに対し、前者は散文の時代の到来を見きわめながら、ジャンルとしての新機軸の感覚は短編ではなく、長編という形式に現れるとして、同時代の作家によるさまざまな長編小説の試みを分析したものである。

長編小説の新機軸を論じるトゥィニャーノフの議論のなかで、ファンタスチカという用語は重要な意義を持っている。従来の長編小説の限界を打ち破るべく舞台を火星へと移したA.トルストイの『アエリータ』について、登場人物のひとりである赤軍兵士のグーセフがもっともよく描けていると評価しながら、火星の革命は地球の革命と変わるところがなく、舞台を火星にする必要はなかったと批判する。一方で、ザミャーチンの『われら』を非常に高く評価し、スタイルの慣性がファンタスチカを呼びさまし、物理的な感覚を呼び起こすほど説得力に満ちていると指摘した。

しかし、ファンタスチカがトゥィニャーノフに教えたもっとも重要なものは、ファンタスティックな事物があるのではなく、それぞれの事物がファンタスティックでありうるという点であった。さらに、極限までおし進めた心理主義は бытовая фантастика に至り、顕微鏡で世界を見たならば特異な世界が見えてくると指摘する。パステルナークの「Детство Люверс」を例としてあげながら、日常の事物を幾千もの破片に分解したのちに再び貼り合わせることで日常の事物は文学のなかでも新しい事物となると論じた。

このような1920年代としては非常に先鋭的なSF論が後の時代のSFファンや作家たちにどのように受容されたかという点についても触れたい。

(みやかぜ こうじ)

【A12】われらが“壁の向こう”で見たものは？

—有理数と無理数—

宮本 宗実

Дが仮病の診断書を「鼻はきらめく刃のよう、唇は鋏」（ザミャーチン『われら』川端訳 p.108）の врач に書いてもらったとき、この доктор は「視線を私に突きさして、細い細い微笑を浮かべた。（中略）この微笑の織りなす繊細な布に、言葉が一文字が一名前が、ただ一つのあの名前が包まれているのを見てとったように思えた…。」(p.136)— имя, единственное имя... と強調されているのは誰か？「鼻はきらめく刃のよう、唇は鋏」の人間（の顔）を「微笑の繊細な布」で包んだらどうなるか？—「切れる！」これは дедекиндово сечение を連想させる。R.Dedekind は G.Cantor の師であり親友だった。

『われら』が書かれる半世紀前、R.Dedekind の “Stetigkeit und irrationale Zahlen” (1872) が出版された。そのとき、有理数は定義されていた。（無理数を含む）実数は知っているつもりになってはいたが、その数学的に厳密な定義はないことが自覚された時代だった。

われらの生きる разумный мир (рациональных чисел) は “古代の不透明な壁” に囲まれていて、その外に広がる бредовой мир (иррациональных чисел) に出た人はなかった。「君（注； $i = \sqrt{-1}$  無理数）はほらそこ、ぼくのそばにいるんだけど、それでもやはり古代の不透明な壁の向こう側にいるみたいだ。（中略）そこに何があるのかも分からない。このままじゃいやだ。」(p.201)—（無理数を含む）実数を厳密に定義しなければならない！

実数を定義する（＝“壁の向こう”に出る）方法が “Dedekind の切断” である。Д はこれに非常に高揚して「私の心臓は軽く飛行機のように速やかだ。そして私を上へ上へと運んで行く。私は明日になればある喜びがやってくるのが分った。どんな喜びとなるであろう？」(p.136)—明日、“切断”に使われている“集合”の概念を勉強しよう、希望に胸を膨らませて。しかし、「私はまったく当惑している。昨日、すべてがもう明らかとなり、すべての X（注；実数の定義）が発見されたと思ったその瞬間に一私の方程式に新たな未知の数量（注；Russell's paradox & Cantor's）が現れたからである。」(p.137)「そしてパラドックスの道はナイフの刃（注；“切断”）にそって進んで行くのであるが—これが恐れを知らぬ知性にふさわしい、唯一の道なのである。」(p.175)

(みやもと むねみ, 京都大学名誉教授)



【B01】カラムジン『ロシア人旅行者の手紙』におけるテキスト・バリエーションの分析

浦井 康男

カラムジン『ロシア人旅行者の手紙』(以下「手紙」と略す)は、近代ロシア文学とロシア文章語の成立期の 1791-92 年に発表され、両者に大きな影響を与えた。この作品は当時のベストセラーになり、生前に 7 回以上版を重ねたが(モスクワジャーナル 1・2 版→単行本 1・2 版→著作集 1・2・3 版)、その度にカラムジン自身の手になる改訂が加えられた。マルチェンコはこのテキストの成立過程を考察することで、「ロシア文章語史の転換期における作家の活動の、実験的プロセスの証人になるであろう」と言っている。またこの改訂過程については、1899 年刊行のシボフスキーの研究が有名で、その結果は現在でも引用されている。

近代ロシア文章語成立期の語彙的・文体的変化を研究している発表者は、「手紙」に対してデータベースを作成し、その運用で、見出し語でまとめたコンコードをすでに刊行しているが、今回このデータベースに、文学記念碑版「手紙」で示されたテキスト・バリエーションのデータを追加し、テキスト・バリエーションの履歴と、版別の語彙を集計した統計表を作成し、カラムジンの改訂過程を語彙的側面からパソコンで分析を試みた結果、カラムジンの「手紙」の改訂過程には、次の 3 段階があることが分かった。

**第 1 段階** (モスクワジャーナル 1・2 版→単行本 1 版) : シボフスキーが *варваризм* と呼び、当時のロシア語では十分こなれていなかったと思われる借用語が書き換えられたが、その多くは単発的で孤立的なものである。一方古語・口語の語彙は、始めからあまり多くは使われていなかったが、それらも書き換えられた。

**第 2 段階** (単行本 1・2 版→著作集 1 版) : 代名詞、前置詞、副詞などの機能語に関して、それらの相当数が、大幅に書き換えられ、また脱落し、カラムジンの文体にかなり大きな変化が生じた。借用語、古語・口語については、単純な書き換えではなく、表現の変化がなされたものが多い。

**第 3 段階** (著作集 1 版→2 版) : 特定の概念を示すいくつかの用語で、その語幹を借用語幹からロシア語語幹に書き換えて精密化した。

このような過程を経て、今日われわれが「手紙」で読むことの出来るカラムジンの文章、つまり彼の「文章語」が確定したとすることが出来よう。また本研究はシボフスキー以降一世紀を経て、この分野の研究で次のステップを示すものとなる。

(うらい やすお, 北海道大学)

【B02】話し言葉の語りにおける談話標識

—ロシア語と日本語の対照研究—

エフィーモワ・ゾーヤ

談話標識は先行する談話とのつながりを示すばかりでなく、談話の流れを統括するものと考えられている。談話標識は談話では任意的な要素として考えるのが一般的だが、実際にはこの表現の頻度はきわめて高く、それゆえ、近年大きな関心を集めるテーマとなっている。これらの表現に関しては、その機能の分類を追ったものから、文脈の展開への貢献を考察したものまで、数多くの実証的研究が行われているが、その大部分は個別言語を扱うもので、言語間の対照研究は手薄で、特にロシア語と日本語との対照研究はきわめて少ない。

本発表では、ロシア語と日本語における談話標識の使い方に差異はあるか、あるとすればそれはどのような差異であるのかを中心に考察する。語りの「多言語の話し言葉コーパス」に基づき、ロシア語の談話標識と日本語の談話標識の頻度およびそれが談話内で現れる位置を対照することにより、この両言語の談話のストラテジーの構造的な差異を明らかにしたい。談話標識の機能にはいくつかのタイプがあるが、本研究では、分析する語りのジャンルに頻繁に現れる次の 3 つの範疇を中心に切りあげて検討する：(1) 連結語 (それでも、それに / *и, потом, но* 等), (2) フィラー (あの、ええと / *ну, значит, потом* 等), (3) 語りの構造標識 (おわり、以上 / *вот, всё* 等)。

データを分析した結果、談話標識が出現する頻度は一般的に日本語よりロシア語の方が高いことが分かる。日本語では 311 節に談話標識が 76 回、ロシア語では 305 節に 120 回も現れる。また、それぞれの範疇の頻度を比較すると、フィラーは両言語でほぼ等しい頻度で現れるが、語りの構造標識と連結語はロシア語の方が頻出する。さらに、両言語の語りの構造標識については、ロシア語では語り内部の境界を示す談話標識が日本語より頻繁に使われることが分かる。日本語の語りにおいて連結語の頻度がロシア語より低いのは、日本語には談話標識ではない連結語と同等の機能を持つ表現手段があるためとも考えられる。連結語の分布をみると、文中に現れる連結語は、日本語の場合は 59 回のうち 7 回 (11.9%) のみで、ロシア語の場合は 88 回のうち 64 回 (72.7%) に達する。すなわち、日本語の連結語は文中にも立ちうるとされるが、実際には文頭に置かれる傾向がある。逆に、ロシア語の連結語はたしかに文頭に立ちうるが、文中に置かれる傾向が強い。

(Зоя Ефимова, 日本学術振興会特別研究員/  
ロシア国立人文大学)

[B03]

**Описание косвенной фонетической межъязыковой интерференции на материале реализации японскими учащимися русских бифонемных консонансов**

*Г.С.Шатохина*

Настоящая работа предполагает одно из описаний косвенной *фонетической межъязыковой интерференции*, при которой на порождение и восприятие русской речи учащихся влияет то, что в материальной форме отсутствует в родном (японском) языке. Предвидеть формы проявления косвенной интерференции трудно, еще труднее типизировать ошибки, вызываемые ею. Тем не менее, преодолеть косвенную интерференцию легче, потому что ошибки этого рода не находят постоянной поддержки в родном языке японских учащихся.

При создании экспериментального материала для настоящего исследования из русских бифонемных консонансов (сочетаний двух согласных – СС) были выбраны семь звуковых комплексов, которые невозможны в японском языке даже на уровне *фраземы*.

186 слов с этими сочетаниями вошли в 123 экспериментальные фразы, которые были записаны на магнитную ленту в исполнении 24 японских дикторов. При отборе дикторов были учтены такие их характеристики, как пол и степень владения русским языком.

Всего в ходе эксперимента было получено 4464 реализации. Весь массив полученных реализаций был разделен на следующие группы.

1. *Нормативные* реализации (в виде изначально заданной звуковой последовательности – ГССГ) исследуемого комплекса без изменения качества его компонентов,
2. *Ненормативные реализации*: *слитные* (с заменой одного или обоих компонентов сочетания на другой согласный) и *неслитные* в шести вариантах:
  - a) с гласной вставкой между согласными;
  - b) с упрощением комплекса до одного согласного или до нуля звука;
  - c) с усложнением консонансного сочетания до трех или четырех согласных;
  - d) с усложнением и гласной вставкой;
  - e) со слогомразделом внутри бифонемного консонанса;
  - f) с необоснованной паузой внутри сочетания.

Общей целью исследования был анализ особенностей реализации японцами исследуемых сочетаний, а также корреляция этих особенностей с социальными характеристиками аудиторов и рядом лингвистических факторов, таких как принадлежность к той или иной части речи слов, содержащих исследуемые бифонемные консонансы, длина данных слов в слогах, положение всего комплекса по отношению к ударению, к границам слова и морфемы.

Фактические данные, приводимые в работе, могут быть полезны в качестве основы для методических рекомендаций при создании постановочных и корректировочных упражнений для японских учащихся на разных этапах обучения русской фонетике.

(東(ひがし)シャトヒナ・ガンナ, 外務省)

[B04]

**Механизмы функционирования теоретической модели интерязыка**

*Н.Н.Рогозная*

Социализация человечества предполагает наличие языковых контактов.

Изоляция народов от других языковых и культурных традиций приводит к информационной недостаточности, застою и даже вырождению национальных групп. Высокоразвитое общество предполагает функционирование многих языков. Сопоставительный аспект – мощный механизм познания языковых контактов.

Известно, что только около 5% населения земного шара достигает совершенного уровня владения иностранным языком.

В основу традиционного способа преподавания языка как иностранного не поставлена главная задача – интенсификация процесса обучения путем раскрытия резервных возможностей мозга за счет активности и интеграции структур коры головного мозга, использующим первичную лингвистическую систему.

Лингводидактическая система вновь изучаемого языка индивида проходит несколько стадий развития: адаптации, декомпенсации, доминирования, субординации, координации. Эти периоды развития новой лингвистической системы фиксируются в коре головного мозга, которому в норме свойственны мобильная устойчивость, четкая регенерация и т.д.

Усвояемость вновь образующейся лингвистической системы может быть значительно повышена (от 20% до 60%) за счет нивелирования интерферентных явлений в интерязыке, преодоления разных стадий субординативного билингвизма и выхода в стадию координативного билингвизма.

Определив уровень знаний неродного языка и нормативные параметры модели образования интерязыка, можно прогнозировать индивидуальный трек обучаемого, установить контроль за формированием уровня интерязыка, сравнивать его с расчетным, выстраивать модель управления, корректировать режим персонального обучения, прогнозировать уровень знаний и отклонения от заданной программы.

В качестве ведущих средств обучения используются четырехфункциональные билингвальные модели обучения, представленные функциональными билингвальными параллельными грамматиками и аннотационными текстами.

Особенностью таких билингвальных моделей является вычленение предсказуемых интерферентов разного уровня: графоферентов, фоноферентов, граммаферентов, лексоферентов, синтаферентов, т.е. блоков семантических узлов разного уровня.

Транспозиция не вычленяется в билингвальных моделях, т.к. представляет универсалию.

(ロゴズナヤ・ニーナ, イルクーソク大学)

【B05】自動詞と造格に立つ語との関係

佐藤 規祥

近年、諸々の文法理論において自動詞が一つのまとまりのあるものではなく、非対格自動詞と非能格自動詞という二つの種類に区別することができるという非対格仮説について、繰り返し論じられている。それら二種類の自動詞の違いは、意味だけではなく、統語構造においても反映するということが、英語をはじめとするヨーロッパの諸言語や日本語においても観察されると言われている。

しかし、ロシア語についてはそれら二種類の自動詞の違いがどのように統語構造に反映しているのか、まだ研究が進んでいないようである。その理由のひとつは、英語においてそれらの自動詞を区別する診断法が、英語に特有の文法現象に適用されているため、文法構造がそれと異なるロシア語では、同じ視点からはその区別が見えてこないことにあると思われる。

そこで、本発表においては、ロシア語で非対格自動詞と非能格自動詞のそれぞれが、どのような統語構造において区別されていると指摘することができるか、そもそもそれらを区別することは、ロシア語の文法現象を説明するうえでどのような意義があるのかについて論じたいと思う。

非対格仮説に従えば、非対格自動詞とは動作の対象を表わす語を主語にとるものであり、ロシア語では他動詞を対に持つ *ся* 動詞、存在や状態、変化を表わす動詞などがある。非対格仮説が提示される以前から、この種の *ся* 動詞は全く別の視点から関心が払われてきた。Т.П.Ломтев は感情の動詞を二つに分類したが、そのうちの一方が非対格自動詞に相当しているようである。また、J.Nicols は非対格自動詞そのものではなく、その動詞と共起しえる述語名詞・形容詞の形態や意味などについて論じた。

まだ仮説を検討する段階において、どのような文法構造で非対格自動詞が用いられるか、ということが問題なのではなく、非対格自動詞と非能格自動詞のいずれか一方が、同一の統語構造では用いられないか、何か別な表現法によらねばならない、という事例を指摘することに意味がある。

本発表でとくに採り上げたのは、二種類の自動詞が形態や役割をあらわす造格に立つ名詞や形容詞と共起しえるか否かが、それらの区別に関係していると思われる事例である。一般にこの場合、非能格自動詞の方が造格の名詞、形容詞を伴うのに制約があるといえる。

(さとう のりよし, 中京大学)

【B06】ロシア語の前置詞と前置詞等価物

—数量名詞語形を中心に—

鈴木 理奈

ロシア語文法において多くの研究要素が残されている前置詞、および、新しい概念である前置詞的単位—前置詞等価物の機能を考察する。本研究の基本的方向性は、機能的文法学の主な手法の一つである機能的コミュニケーション言語学モデルによるが、そのコンセプトにおける前置詞は、文中の名詞と意味的、統語的役割を果たす従属的な最小限の語彙単位、また統語素を形成する単位として定義される。

このような観点から、固有の前置詞 (*в, около* 等)と同様に、前置詞的機能の役割をはたす前置詞等価物の存在を確認する事ができる。本研究においては、前置詞等価物である相関的前置詞の、数量的名辞グループが考察の対象となる。

例) *доска длиной два метра.*

事物の測定基準となる数量名詞には、*высота, длина* 等が挙げられるが、これらは、相関的前置詞の機能の中で、前置詞を伴わない形と、伴う形の統語的語形を持つ。

例) *длиной – в длину.*

数量名詞語形は構造成分に、数量名詞、数詞、数量単位、を含む基本語形を形成するが、名辞グループの構成には、必須成分の他、数量名詞語形の表現を複雑化する *в, около, более, примерно, расчётный, общий* 等の従属的成分も入りうる。

例) *Доска длиной от пяти метров.*

これらの前置詞的単位に支配を受ける数詞は、おもに、主格、生格、与格、対格の形をとる。

例) *Цистерна ёмкостью тысяча литров; Пакет весом от ста граммов; Бутылки объёмом по одному литру; Дерево высотой с метр.*

しかし、この格支配の規則性は、次のような要因により逸脱する事がある。

[1] 語形単位の語順変化

例) *Дерево трёх метров высотой.*

[2] 格支配を受ける数量構成単位の性質：生格を支配する従属的成分を伴う場合でも主格の形をとる複合的数詞 (2つ以上の構成単位による数詞) の語形

例) *Частица величиной не более ноль целых пять десятых метра.*

相関的前置詞の機能を持つ *длиной два метра* 等は、一つの統語素の中で体系的に単位が結合するため、特別な前置詞機能をはたす語形であると言える。

(すずき りな)

【B07】

**Значение упражнений для предупреждения и устранения грамматических ошибок японских учащихся в структуре практического занятия по русскому языку**

*Ю.Клочков*

Проблема предупреждения, коррекции и устранения ошибок в иноязычной речи относится к обучению в целом, к структуре учебного занятия, составляющего основную единицу учебной деятельности, и к более мелким единицам учебного процесса (звену урока, отдельной методической задаче). Предупреждение и устранение ошибок представляет собой работу над зафиксированными типичными ошибками, поэтому для предупреждения и устранения ошибок используются преимущественно те средства и приемы, которые разработаны для ознакомления с новым материалом и выработки навыков его употребления в речи.

Работа над ошибками требует индивидуального подхода к каждому учащемуся, а также учета национальных традиций педагогики, лингвистики и особенностей национальной психологии восприятия педагогического воздействия.

На начальном этапе изучения русского языка японские учащиеся, попадая в ситуацию учебного общения на русском языке, не всегда чувствуют себя уверенно. Они довольно часто переживают психологический стресс и определенную эмоциональную напряженность. Это в значительной мере способствует нарушениям в их речи, пассивности, слишком долгому обдумыванию ответа, путанице мыслей, оговоркам.

Предупреждение и устранение ошибок можно проводить за счет упражнений. Значение упражнений очень велико, поскольку они способствуют выработке у японских учащихся правильных навыков владения письменной и устной речью на русском языке. Упражнения тесным образом связаны с введением грамматического материала, предупреждением и исправлением ошибок в речи учащихся.

Для предупреждения и устранения ошибок японских учащихся, с нашей точки зрения, нужно построить комплексы упражнений в таком порядке, чтобы они обеспечивали формирование речевых грамматических навыков. Перед объяснением учебного материала можно предложить предваряющий подготовительный комплекс упражнений, куда могут входить грамматические, лексические, фонетические упражнения, направленные на повторение, коррекцию, активизацию материала, актуального для осмысления устройства словосочетаний и предложений, которые могут употребляться на данном уроке. Далее последовательно выделяются три основных этапа формирования навыка в продуктивной речи: 1) ознакомительные и для первичного закрепления; 2) тренировочные; 3) речевые. На каждом этапе используются соответствующие группы упражнений.

(クロチコフ・ユウリー, 駒澤大学)

【B08】

**Русский язык для детей-билингвов и детей-мигрантов в Японии**

*С.Сивакова*

Начало Третьего Тысячелетия в Японии ознаменовалось как ростом международных браков между русскими и японцами, так и развитием и укреплением деловых связей между нашими двумя странами. Результатами этого явились и повышенная рождаемость билингвальных детей в русско-японских семьях, и увеличение количества детей-мигрантов из числа русских семей, работающих и проживающих на Архипелаге.

В последние пять-десять лет наблюдается очень высокий спрос на русские детские образовательные учреждения, в которых русскоговорящие дети, плохо знающие русский язык и русскую культуру, получают необходимые знания. Проблема сохранения русского языка в семьях соотечественников, проживающих в Японии стоит очень остро.

В данном докладе рассматривается, ставшей насущной, проблема обучения русскому языку и русской культуре детей-билингвов и детей-мигрантов из числа русско-японских и русских семей, проживающих в Японии. В докладе, подробно рассказывается об опыте и авторской методике обучения русскому языку в Культурно-Образовательном Центре обучения русскому языку ЛИНГВАДАР, как перспективной модели русской гуманитарной школы (начальной и средней), успешно работающей с мая 2007 года в центре Токио.

Целью данного выступления является привлечение известных японских и русских ученых, методистов и преподавателей к данной проблеме и возможной подготовке новых специальных учебных материалов, способных повысить научный потенциал и значимость преподавания русского языка билингвальным детям в Японии.

(シヴァコーヴァ・ステラ, 創価大学)

【B09】

Своеобразие современной русской речи на примере использования логоэпистем

Д. Судзуки, К. Такахаси, А. Тамура, В. Жданов

В настоящее время в русском языке появилась тенденция к семантической и структурной трансформации эмоционально-экспрессивных речевых единиц, хорошо известных носителям речи и отражающих те или иные явления культуры, истории, литературы, ранее определяемые как *крылатые слова* или *скрытые цитаты*.

Структурно-семантико трансформированные речевые единицы данного типа сейчас получили наименование *логоэпистемы*.

В докладе рассматривается обоснование возникновения такого феноменального языкового явления, как *логоэпистема*, выявляется его специфика в сопоставлении с другими, близкими по значению терминами: *крылатые слова*, *аккулема*, *культурема*, *концепт*, анализируются особенности функционирования логоэпистем в современной речи с позиции когнитивистики.

Термин *логоэпистема* был предложен российскими учёными Бурвиковой Н.Д. и Костомаровым В.Г. в 1995 году (логоэпистемы, по их словам, это «языковые носители культурной памяти народа» в широком смысле слова) для определения нового функционального использования не только крылатых слов, но и афоризмов, пословиц, поговорок, прецедентных речевых высказываний из выступлений политических деятелей, популярных фильмов, песен, анекдотов.

По мнению Бурвиковой Н.Д. и Костомарова В.Г., в 80-90 годы в результате последовательно сменивших друг друга таких социально-языковых процессов, как *либерализация*, *демократизация* и *карнавализация*, изменился «языковой вкус эпохи» и возникли новые потребности в речевой коммуникации (Костомаров В.Г., Бурвикова Н.Д. Пространство современного русского дискурса и единицы его описания // Русский язык в центре Европы. Банска-Бистрица, 1999). Если основная функция использования эмоционально-экспрессивных речевых единиц типа крылатых слов, афоризмов и пр. в XX веке была преимущественно направлена на создание более красивой и образной речи, то на рубеже веков смысловой потенциал этих эмоционально-экспрессивных блоков значительно расширился и они стали выполнять функцию зашифровки текстов и речевых высказываний, выражения словесной многозначности, языковой игры, «ёрничества» и даже «стёба».

Изучение логоэпистем представляется обязательным компонентом современного процесса преподавания русского языка.

В докладе также обращается внимание на проблему перевода логоэпистем и предлагаются наиболее адекватные варианты их перевода на японский язык.

(ジダーノフ・ヴラヂーミル, 鈴木淳一,  
高橋健一郎, 田村愛火, 札幌大学)

【C01】 ロシア人の見た日本

—シュパンベルグ探検隊の日本北辺航海—

有泉 和子

ピョートル大帝の命により組織された海軍大佐ベーリング指揮下のその後数次にわたる探検は、あまりにも大規模なものであったために、準備に多大な歳月を要し、大帝自身はその成果を知ることが出来なかった。

だが、ロシアの北方探検および地図作成の歴史においては、重要な役割を果たす。

そのうち、所謂「第二次カムチャツカ探検隊」は、北太平洋と北極海における海洋探検と地理学、民俗学の調査を兼ねたもので、各分野の学者も多数同行した。

このベーリング第二次探検隊に加わったデンマーク出身の海軍士官シュパンベルグは、1738年6月、帆船アルハンゲル・ミハイル号で、僚船二艘(翌年一艘増)とともにオホーツク港を出発、クリール諸島を蝦夷島までたどり、翌年6月日本の本州沿岸に達し、仙台藩領の牡鹿半島、現在の石巻市沖に停泊した時には、庶民と交流し、あるいは仙台藩士の訪問を受けている。

僚船とはぐれた V.ウォールトン大尉率いる聖ガブリエル号もまた同時期安房沖に姿を現す。

このロシア船の来航は、和暦では元文4年5月であったために、日本では所謂「元文の黒船」と称され、日本側にも大槻玄沢の著書を始め、多数の関係記事がみられる。徳川吉宗や町奉行大岡越前守の時代である。

18世紀前半の公文行書体( служебная скоропись)で書かれたシュパンベルグ探検隊の全ての艦船の歴大な当直日誌や海軍省宛報告書類は、現在ロシア国立海軍文書館に保存されている。

シュパンベルグの探検は、当時の帆船航海としては比較的 successful したものと言え、またその航海日誌や報告書は、「事実」の描写であるはずにもかかわらず、なぜか、今日の我々日本人の目から見ると、不思議な、あるいは、より端的に表現すれば、実態とかけ離れた対日情報までが含まれている。

この最初期の日本情報は、その後の日露関係史の進行方向を決めることになるが、その中央政府への報告のされ方や、海軍省・学界の反応と混乱ぶりを分析すると、現ロシアの北方諸島領有の根拠である対日遠征の歴史は、正確さの点から言っても問題があり、ロシアの歴史に比べると遥かに長い我国の歴史の中では、決して古くは遡るわけではないことが指摘できる。

(ありいずみ かずこ, 東京大学史料編纂所)

【C02】1830-40年代の教育システムにおける新しい  
関心—C.ウヴァーロフと「ナロードノスチ」—  
坂中 紀夫

19世紀前半の文部省管下の教育行政において、国民形成的な理念に新しく関心がおかれるようになったことを論証する。具体的な作業としては、当時の文部大臣セルゲイ・ウヴァーロフの教育原則「正教・専制・ナロードノスチ」における「ナロードノスチ」概念の内容に言及し、その構成がネーションと同型的であることを指摘する。そうであれば、「ナロードノスチ」を原則とすることは、彼が教育を通じた国民形成を志向していたことになるからである。

以上の作業は、ウヴァーロフの新しさを、教育行政のそれまでの主たる関心との対比において強調する形で進められる。後者に関しては、当時の法制度への参照により、その基本理念を析出する。19世紀前半に関する教育史において、特に重要なのは1804年の「大学管下諸学校令」など文部省創設期の諸法令と1828年の改訂「大学管下諸学校令」である。前者は各種学校の入学条件に関する身分開放性を謳い、後者はそれに関する身分優先指定を定めた。しかし実際には、前者に関しては、教育が高等になるほど身分的排除の圧力が高まり、後者に関しては、身分的排除は推奨されたものの厳密に適用されたわけではなかった。つまり、両者は身分制原理を共通して不徹底に採用していたわけだ。この結果、非貴族・非官吏層の中・高等教育への流入が許容されることになったのだが、当時は教育が国家勤務への要件とされていたことを勘案すれば、教育行政がこの不徹底さから期待していたのは、官吏要員の十分な確保であったとの推認を導けるだろう。であれば、この時期の教育行政の主たる関心として、身分制の確立と官吏養成の二点を指摘できることになる。

ウヴァーロフの「ナロードノスチ」概念は、以上の二系列からなる教育システムに新しく組み込まれたものとして対象化される。ただ、この概念は明示的に定義付けられておらず、内容的特定性も乏しい。そこで、その内容を推察する有効な手段として、彼の教育政策と歴史観を参照する。それが教育原則である以上、実際の政策にその反映を予期でき、また、それが案出された前提への参照は、その概念がとりうる構造の特徴や限界を示唆してくれるからだ。その結果、「ナロードノスチ」とネーションの概念の同型性が指摘され、国民形成的な理念がウヴァーロフ期の教育行政の明示的な新しい関心だったことが示されるだろう。

(さかなか のりお、神戸市外国語大学院生)

【C03】古儀式派スキンヘッド—ニコライ・コロリ  
ョフの『スキンヘッドバイブル・新約』について—  
塚田 力

ニコライ・コロリョフ(Николай Королёв)は1981年モスクワ生まれ、古儀式派の容僧派の一派、ベロクリニツキー派の信仰を持つコサックの家庭に育った。2001年に愛国者団体«СПАС»を結成し、そのリーダーとしてモスクワとその近郊でエスニックマイノリティに対する一連のテロ攻撃を実行した。その中には14人の死者と61人の負傷者を出した2006年8月11日のチェルキーゾフスキー市場での爆弾テロも含まれる。2006年9月に逮捕され、2008年3月15日にモスクワ市裁判所で終身刑の判決を受け、現在上告中である。

彼の獄中作『スキンヘッドバイブル・新約 Библия скинхеда. Новый завет.』は2008年に出版された。

著者自ら前書きで述べているように、本書のタイトルはジョージ・マーシャル(George Marshall)の“Spirit of '69: A Skinhead Bible”からとられている。マーシャルはイギリスに源流を持つスキンヘッド運動は初期においてレイシズムの要素を持っておらず、現在の反ファシズムスキンヘッド運動こそが原初的なスキンヘッドたちに近いと主張している。しかし、コロリョフはネオナチスキンヘッド運動こそが原初的なスキンヘッド運動の正統的な継承者であると述べている。マーシャルの著書を旧約聖書に、自らの著書を新約聖書になぞらえ、その継承性を訴えている。

その冒頭で「全能の神よ、我、我が友であるロシアの民衆とすべての白人、そしてすべての善良な人々を祝福せよ。我を敵に打ち勝たせよ。我が人種の未来を祝福せよ」とあるように、本書は典型的なロシアネオナチ思想に基づいて非白人への攻撃を呼びかけている。

本書がその他のネオナチ思想家の諸著作と大きく異なる点は、繰り返し著者の古儀式派信仰が語られ、古儀式派信仰が重要な位置を占めているところにある。

本報告では古儀式派信徒でありながらネオナチスキンヘッドとして活動したコロリョフの思想を、その古儀式派的要素に注目しつつ考察する。

(つかだ つとむ、北海道大学院生)

【C04】《エヴゲーニイ・オネーギン》プーシキンから  
チャイコフスキーへ—原詩の音楽的処理を探る

—柳 富美子

発表者が20年来取り組んでいる、「ロシア音楽における言葉と旋律の有機的關係」について、今回は具体的な一つの作品を詳解する。《エヴゲーニイ・オネーギン》を取り上げた理由は、まず第一に原詩・オペラが共に有名であるから、そして第二に、近年このオペラの上演回数が増えているにも拘わらず、音楽作品としての《エヴゲーニイ・オネーギン》を読み解く上で不可欠であるはずの、原詩と楽曲の分析を併せた研究が皆無だったからである。

本論は次の3つの柱から成る。

まず、原詩とオペラ台本とのシノプシスの比較。台本からカットした部分をチャイコフスキーがどのようにオペラの中で音楽的に処理しているか。中には、今回初めて国内で指摘する重要な旋律の引用も含まれている。

次に、原詩を利用している箇所を、シェーナ（独立した歌にはなっていない場面）とナンバー（単独の楽曲や歌）に分けて分析する。ナンバーでは、特に有名な〈タチヤーナからオネーギンへ当てた手紙〉と〈レンスキーのアリア〉を詳解する予定である。特に後者は、チャイコフスキーの作曲家としての技巧が光っている楽曲で、四脚弱強格14行を1連とする原詩の、2連分をそのまま使って、三部形式のアリアにどう収めたのかを、原詩・譜例と共に見る。

最後に試論として、楽曲の全体構造と原作との関係を、原作・オペラ共に同時期に書かれたムソルグスキー《ボリース・ゴドゥノーフ》と比較し、チャイコフスキーがこの作品のオペラ化を目論んだ音楽的な理由を考察する。ここでも、従来研究では全く触れられなかったチャイコフスキーの結婚生活に関する新しい資料を援用する。

本論を通じて、ロシア語を伴う音楽作品研究に、新たな一石が投げられれば幸いである。

(ひとつやなぎ ふみこ)

【C05】M. M. バフチンの対話理論における人格とモノの概念—C. JI. フランクとの比較から—

見附 陽介

この発表は、伝統的なロシア思想に対するバフチンの位置を確認することを目的としている。その際に着目するのが、バフチンの対話理論における人格とモノの概念である。この二つの概念の対置がバフチンの対話理論を基礎づける中心的な構成要素であることを、バフチンにおける「汝」および「物象化」の概念を検討することで明らかにする（第一節：対話と物象化）。

次に、バフチンの言う「物象化」という言葉を、A. Φ. ローセフにおけるこの言葉の使用と比較することで、バフチンにおける人格とモノの概念がローセフに見られるようなロシア・プラトニズム的な意味とは異なり、むしろ尊厳をもつ人格と価格をもつ物件とを対置するカント的なモデルに従っていることを確認する（第二節：「物象化」の意味—A. Φ. ローセフとの比較から）。

以上を踏まえた上で、バフチンの思想とフランクの思想を比較検討する（第三節：バフチンとフランク）。その際、まずフランクにおける「我」と「汝」の思想を1925年の論文「《我》と《我々》」、および1930年の著作『社会の精神的基礎』、1939年の著作『理解し得ないもの』などの議論を手掛かりに、ごく簡単に確認する（3-1：フランクにおける「我」と「汝」の思想）。

このような作業のなかで、二つの点が明らかにされる。一つは、他の「我—汝」論とフランクの議論を隔てる特徴的な要素である「我々」というカテゴリーの性格である。フランクにおいて「我々」というカテゴリーは、「我」と「汝」が差異化によってそこから由来するところの「第一次的なカテゴリー」であり、「根源的な、内的な全一 всеединство」と理解されている。もう一つは、バフチンとの類似点として、フランクにおいてもやはり人間が単にモノとして扱われる事態が社会の「外的な機械的な層」のなかに見出されているという点が確認される。

以上を踏まえた上で、最後にバフチンとフランクの相違点を検証し、これによってロシア思想におけるバフチンの位置を検討する（3-2：「我々」と「対話」）。フランクは「我々」を「分離性と相互浸透の統一」、「相互に結びつけられた多中心的システム」とも規定しており、これは一見するとバフチンのポリフォニー概念に近いものであるかのように思える。しかし原理的には両者はまったく異なる前提に立っていることを、バフチンの「外在性」の理念に着目して検討する。

(みつけ ようすけ、北海道大学院生)

【D-α】ワークショップ：ロシア文学にとって翻訳とは何か？ —理論・実践・受容—

望月哲男, 木村崇, 沼野充義, 吉岡ゆき, 柴田元幸

【趣旨】

日本ではロシア文学の翻訳に関しては長い伝統と豊かな実績があるが、翻訳の本質については本格的な議論が十分行われてきたとは言いがたく、学会員の間でさえも、文学の翻訳に関するきちんとした理解が共有されているとは言いがたい。そういった状況を踏まえ、このワークショップでは、

- (1) 文学の翻訳に関するソ連・ロシアや欧米での理論的水準を踏まえながら、
- (2) 翻訳の理論的考察や実践においてパネリストが自ら直面してきた問題を検討し、
- (3) 翻訳を単なる語学的正確さや翻訳家の職人芸の問題に還元せず、それ自体きちんとした検討に値する文化的な現象として位置づけたための基本的な視点を提供することを目的とする。

そして、ロシア文学の優れた翻訳とはどのようなものであるべきかをめぐり、率直で建設的な討論の場としたい。

また議論がロシア語ロシア文学専門家の間だけでしか通用しない狭い視野のものになることを避けるため、ロシア文学会の外から、英米文学の翻訳家である柴田元幸氏にコメンテーターとして加わっていただき、検討を多角的にしたい。

司会：望月哲男（北海道大学）

【報告要旨】

文芸翻訳の理論化にむけて

木村 崇（京都大学名誉教授）

ソ連時代の文芸翻訳理論では、文学作品の「翻訳」とは異言語による「形象の再現」だとされてきた。しかし文学テキストは本質的に多義的であるので、翻訳者が原テキストから受容し再現する形象はひとつの解釈にすぎず、原テキストの多義性を犠牲にせざるを得ないことになる。視覚障害者のための「音読」は読み手によるテキスト解釈を可能な限り排除し、「朗読」とは対極的方向でのテキスト再現をめざすという。文芸翻訳にも「音読」的方法は可能だろうか。ロシア文学作品の翻訳実例を分析しながら翻訳理論構築の原理的問題を解明することによって、感性的段階にとどまりがちな翻訳論争の出口をさぐりたい。

美女と醜女、または翻訳可能性と不可能性の間で

沼野 充義（東京大学）

文学作品の翻訳は原文が多義的・多層的であるため、唯一の正解はあり得ない。そのため訳者の技能や個性、原文の性格、また訳者の所属する文化によって、様々なストラテジーが生じ、Apterの言うように、翻訳者は「翻訳可能性」と「不可能性」の間で一あるいは米原万里流に言えば「浮気な美女」と「貞淑な醜女」の間で一揺れ動くことになる。1980年代以降欧米で盛んになった文化研究としての翻訳学の対象は、じつは2言語間での「揺れ」そのものであると言ってよい。この報告では、Venutiの言う「馴化」と「異化」や、Damroschの主張する「世界文学とは翻訳を通じて（失われるものではなく）価値を増すもの」といった考え方を整理しながら、ロシア文学翻訳の問題に適用できるか、考えてみたい。

読む、見る、聞く

吉岡 ゆき（東京外国語大学、翻訳家・通訳）

私が翻訳を手掛けてきたのは、古いものでも1920年代の散文のみで、描かれているのは同時代か、時を遡るにしても、せいぜい主人公の子供時代。翻訳の最大の課題「原文をどう生かすか」は、私にとっては、原文が標準的なロシア語から逸脱している度合いと、訳文が標準的な日本語から逸脱している度合いを、どうやって限りなく近いものにするかであった。語順はロシア語も日本語もかなり自由になる。語彙に関しては、例えば、漢語か和語かという悩みは以前から大いにあった。だが今の私の翻訳をめぐる一番の戸惑いは、私自身も体験済みの、出版社による、漢字使用（制限）である。「聞くと見るでは大違い」言語である日本語の基準、標準が見えなくなっている最大の原因であり、帰結かもしれない。

【コメンテーター】

柴田 元幸 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（現代文芸論）、英米文学翻訳家。

現代アメリカ文学の数多い翻訳で知られ、オースター、ミルハウザー、ダイバック、ブラウン、パワーズ、ユアグローなどの作家を日本に紹介してきた。訳書は膨大な数にのぼり、広範な読者に読まれている。また『翻訳教室』（新書館）や村上春樹との共著『翻訳夜話』『翻訳夜話2』（文春新書）など、翻訳に関する論考も多い。



【D-β】ワークショップ：チャストゥーシカの複合的研究に向けて—コストロマ州ネレフタ地区の採録資料を題材に—

伊東一郎, 熊野谷葉子, 柚木かおり

### (1) チャストゥーシカへのアプローチ—文学・フォークロア研究・音楽学の立場から

チャストゥーシカは短い詩の形を持つが、メロディーをつけて歌われ、しばしば楽器演奏や踊りも伴うため、多角的な分析が必要とされる。しかし実際には、その研究や出版は、研究者の立場によって偏っている。

本報告では、このジャンルがどのように捉えられ、研究されてきたかについて、文学(伊東)、フォークロア研究(熊野谷)、音楽学(柚木)のそれぞれの立場から報告を行い、それぞれの特徴と、相互交流の欠如による問題点を明らかにする。

最初に伊東がチャストゥーシカについてその概括的な定義を紹介する。チャストゥーシカの成立と普及は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてで、ロシア・フォークロアのジャンルの中では最も新しい。その特徴は伝承性よりもむしろ生産性にあり、内容的には鋭いアイロニーを核とする。従って文学に与えた影響もそれまでの伝統的ジャンルのそれとは大きく異なっていた。文学作品に取り入れられたチャストゥーシカの例をブロック、マヤコフスキーなどから例を取り、具体的に検討する。

一方、ソ連・ロシアの大学のフォークロア講座は、フィールドワークによってチャストゥーシカを採集し、テキストを出版してきた。そのほとんどは歌詞の羅列であり、歌や伴奏の楽譜は、あったとしても附録として数例が掲載されるにすぎない。こうした出版形式は、チャストゥーシカの歌われる場や、旋律と伴奏についての具体的な状況をほとんど伝えない。研究者の視点も、歌の内容、詩的手法、分類と起源の追求に集中しており、伴奏や踊りについては、各種の名称が挙げられることはあっても、詳しい言及はないに等しい。熊野谷は、こうした詩的テキストを対象とする研究と出版の限界を認識するとともに、言語への興味の薄い音楽学者の仕事に対する疑問も提示したい。

ロシアの音楽学者によるチャストゥーシカ研究には大きく 2 つの系統があり、いずれもフォークロア研究とは相互補完的関係にあるにも拘わらず、ほとんど交流がない。第 1 の系統は、E. ギッピウスに代表され、その抑揚を音楽的に捉えて問題にする。第 2 は、「文化の保存」という名目の文化事業の一環として行われ、調査報告や出版物においては、チャストゥーシカのテキストは楽譜の傍らに載せ、音楽テキストに付随する

ものとして扱う。あくまで音楽テキストの収集が目的で、詩的テキストの多様性は追わない。フォークロアの出版物に対して音楽学者が発する疑問は、当然ながら、「これらのチャストゥーシカは一体どの節で歌われていたのか」である。「音が鳴り響く環境」を対象に文化的側面から研究を進めている柚木は、本報告では第 2 の系統について批判的かつ建設的考察を加えていきたい。

### (2) ネレフタ地区のグリャーニエにおけるチャストゥーシカの分析

ここでは、(1) で指摘した問題点をふまえ、文学・フォークロア研究・音楽学の各分野による共同研究を試みる。分析対象は、柚木が 2000-03 年にコストロマ州ネレフタ地区で「楽器バラライカが鳴り響く空間」を描き出すために行った調査から得られた音資料を中心とし、同地区の出版物を補助的に用いる。

当地はバラライカの節回し(наигрыш)の種類が多彩で、かつ似通っていないながら、村ごとに呼称と節回しが一致せず、音楽文化の記述は困難を極める。柚木は、まずバラライカのレパートリーの、①従来のロシア人音楽学者の、当該音楽の成立年代による分類、②「その音楽で何をしていたか」という、音楽の機能とその演奏の場を基準にした分類を示す。次に、当地における「チャストゥーシカ」という名称が、上記のうちどの分野に該当するかを示す。

ネレフタ地区におけるバラライカの節は、グリャーニエに用いられるだけでも 10 種類以上を数える。それらは大きく「道を歩く節」「踊りの節」「座って歌う節」に分類されるが、音楽学ではそれらの節の違いに詩的テキストを絡めて論じることはほとんどない。一方、フォークロア研究では、踊り歌の Камаринская や Барыня、2 行詩の Семёновна や Страдание といった節回しの名称が知られてはいるものの、短い叙情歌のジャンル全体を「チャストゥーシカ」の名称でひとくくりにしてしまい、節回しの違いにはおよそ無頓着である。そこで熊野谷は、それぞれの節回しで歌われる詩的テキストを分析し、演奏の場や身体動作の違いと、歌のリズムと韻律、内容との関係について報告する。

最後に伊東が 2 人の報告を受けて、複合的な文化現象としてのチャストゥーシカを文学研究、フォークロア研究、音楽学の 3 つの角度から総合的に捉える視点についてまとめてみたい。

(いとう いちろう, 早稲田大学,  
くまのや ようこ, 慶應義塾大学,  
ゆのき かおり, 関西外国語大学)

以上の研究報告要旨は、著者に無断で引用はできません。  
Not for quotation without the author's agreement.

Published by the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature  
c/o Assoc. Prof. G. Hikita  
Department of Russian and East European Studies  
Faculty of Foreign Studies  
Tokyo University of Foreign Studies  
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan  
© 2008 JASRLL

ロシア語ロシア文学研究 第40号(2)

日本ロシア文学会第58回研究発表会  
報告要旨(予稿)集

(2008年10月11~12日, 中京大学)

2008年9月1日発行

発行者 日本ロシア文学会 井桁貞義

〒183-8534

府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学外国語学部 匹田研究室内

日本ロシア文学会事務局

ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/robun/>